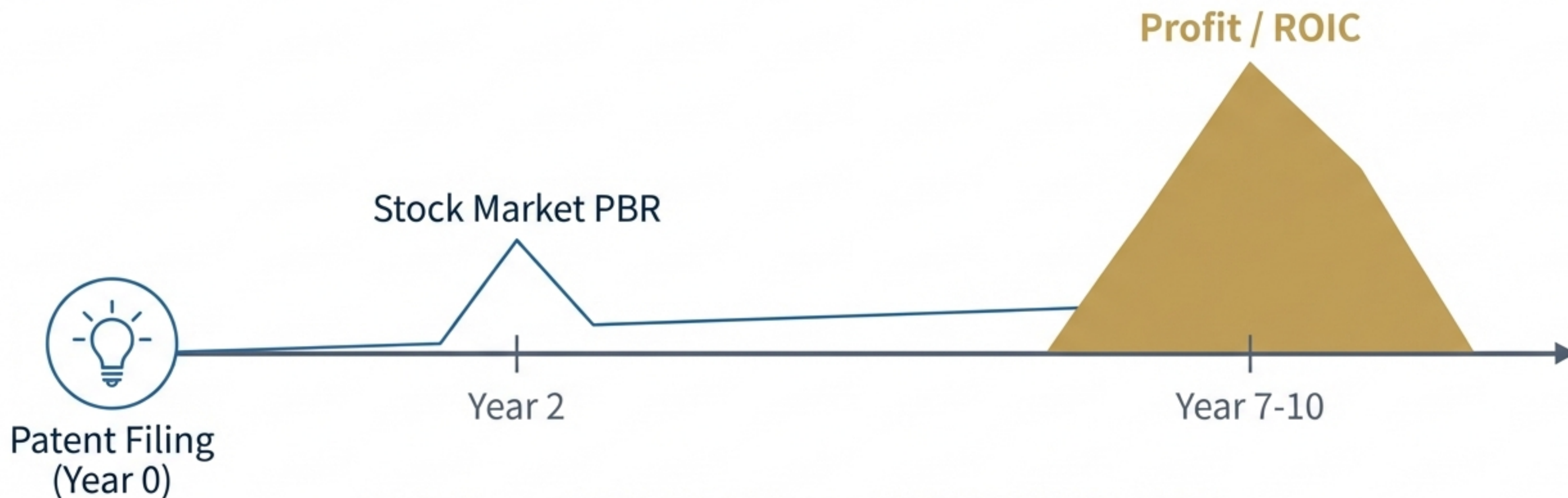


重要特許と企業業績の「10年の時差」

新指標MPSが解明する知財価値と財務KPIの連動性



Based on the research by Sugimitsu, Tatsumoto, et al. (2023) and DBJ Report (2025).

エグゼクティブ・サマリー： 知財価値の顕在化プロセス

1. The Lag (10 Years)

高品質な特許 (MPS) は利益率を向上させるが、その相関が最大化するのは出願出願から **7~10年後** にしても相標~10年む) である (化学セクターでは10年、相関係数0.59)。



2. The Market (2 Years)

株式市場は財務指標よりも早く反応する。PBR (株価純資産倍率) は、重要特許の蓄積に対して **約2年後** に有意な正の相関 (0.23) を示す。



3. The Action

短期的なPL(損益計算書)だけで知財投資を評価するのは危険である。経営陣はMPSのような透明性の高い指標を用い、「将来の競争優位」として投資家に説明する必要がある。



経営と投資家の間に存在する「共通言語」の欠如

企業側の現状 (Corporate Reality)

2021年コーポレートガバナンス・コード改訂

上場企業は「知財への投資・活用」の開示と監督が義務化された。
しかし、従来の「特許件数」だけの示では、将来のキャッシュフローや持続的競争優位を説明できない。



Patent Counts

投資家側の要求 (Investor Needs)

将来キャッシュフローの予測

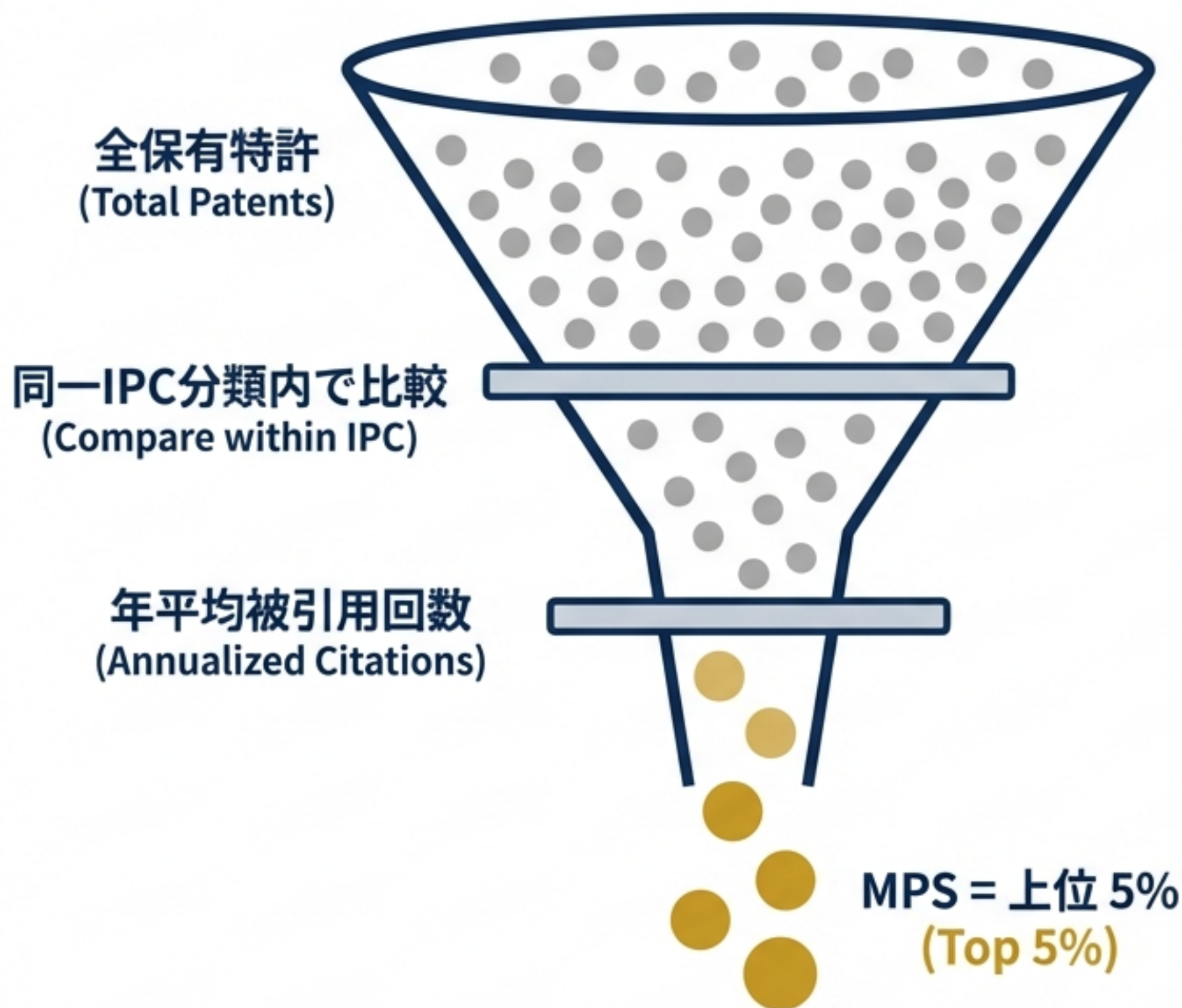
経営層と投資家の間で、知財と財務を論理的に結びつける新たなKPIが必要。ブラックボックス化せず、誰もが検証可能な「透明性」と「簡便性」を備えた指標が求められている。



Transparency

MPS

新指標 MPS (Material Patent Score) の定義と優位性



MPS Definition:

同一技術分野（IPC分類）内で、出願経過年数で基準化した「年平均被引用回数」が上位5%に入る特許。

エリート特許の抽出

企業が保有する特許群の中から、将来の利益源泉となりうる「上位5%」のみをカウント。

年齢バイアスの排除

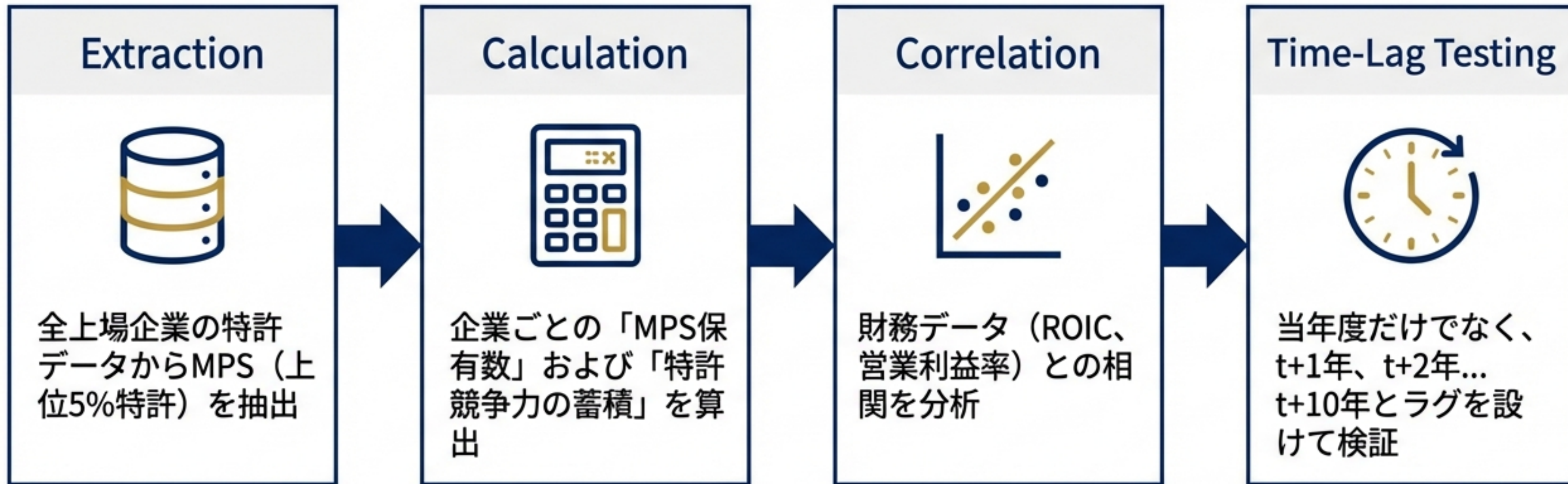
累積被引用数ではなく「年平均」を用いることで、古い特許が有利になるバイアスを排除。

透明性 (Transparency)

複雑なブラックボックス・アルゴリズムを使用せず、誰でも検証可能。

分析手法：特許データと財務データの突合

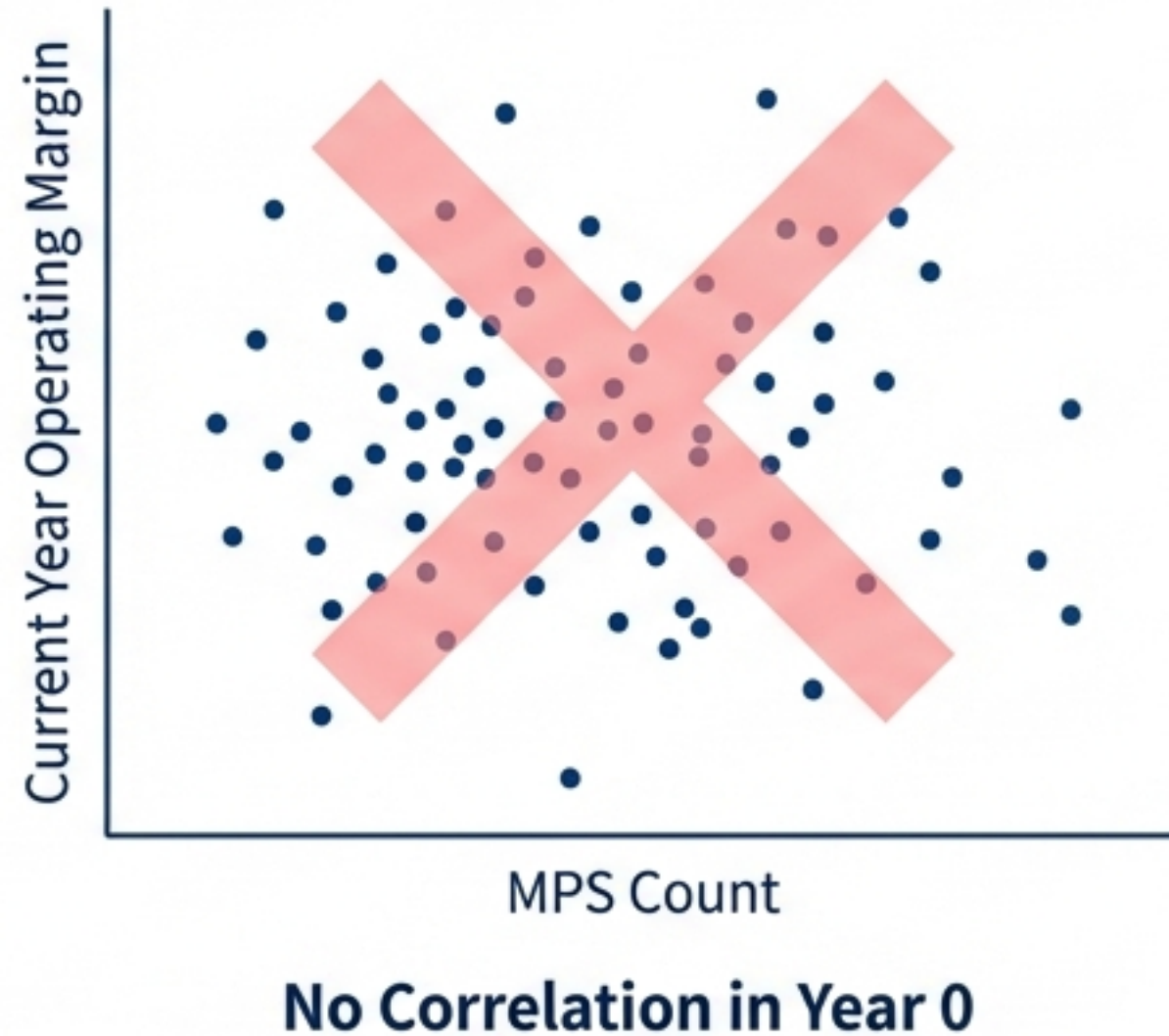
Source: 杉光一成・立本博文・波多野紅美・天野達郎 (2023) 「重要特許が企業の財務データに及ぼす影響の一考察」



H1: Immediate Impact (Same year) -> ?

H2: Delayed Impact (Time lag) -> ?

短期的な利益貢献の不在（仮説1の棄却）



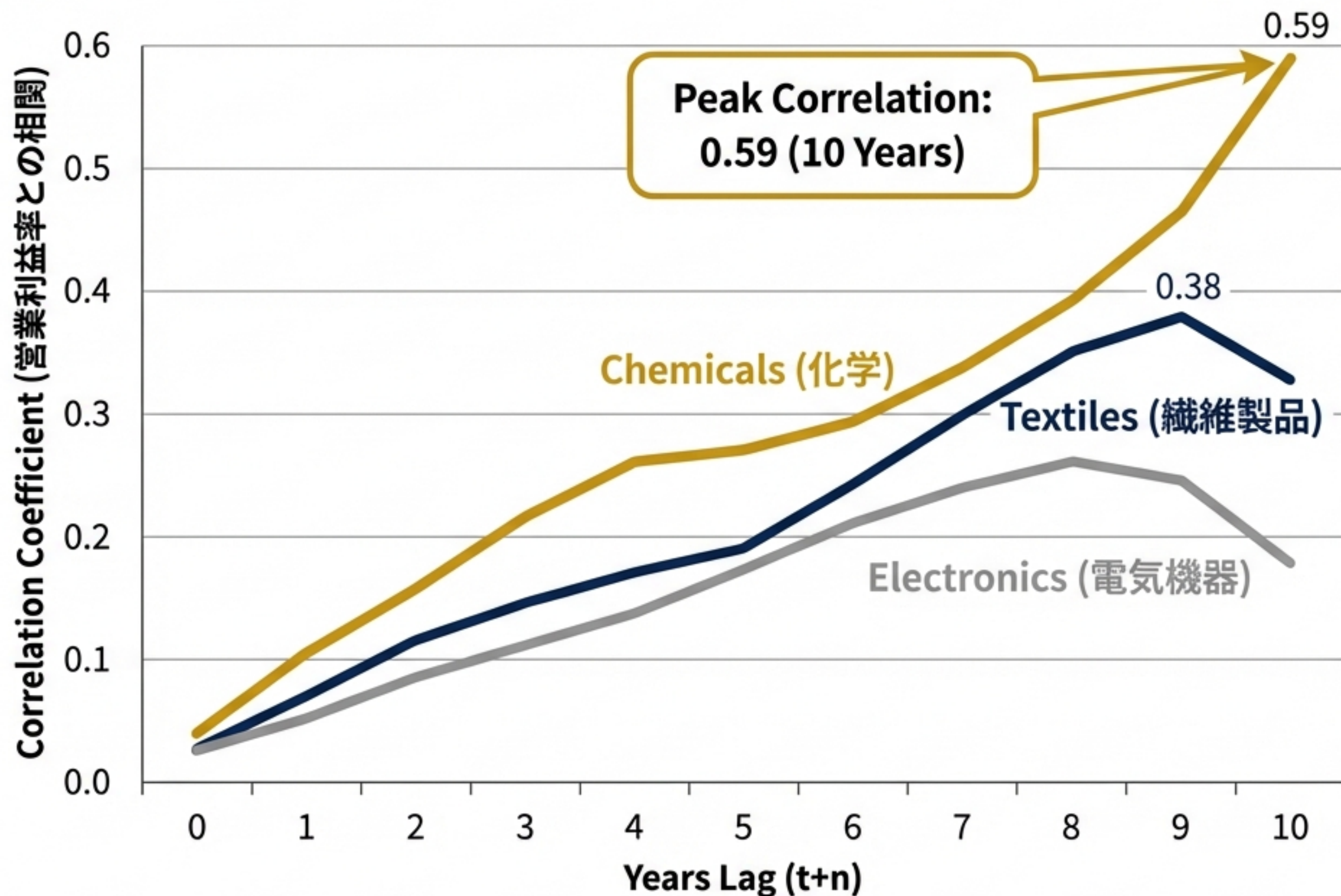
「重要特許（MPS）が多い企業ほど、当年度の利益率が高い」という仮説は支持されなかった。

Why? (要因)

- **Time to Market:** 特許が製品化され、参入障壁として機能するまでには時間がかかる。
- **Economic Noise:** 単年度の財務データは、景気変動や外的要因（ノイズ）の影響を強く受けるため、知財の貢献が埋もれてしまう。

Takeaway: 「昨年の知財投資の成果を今年の利益で判断してはならない」。
短期的なPL志向は、長期的なR&D戦略を誤らせる。

「10年の時差」：セクター別に見る利益貢献のタイムラグ



MPSが財務パフォーマンスに寄与するには明確な時間的ラグがある（仮説2の支持）。

従来言われてきた「R&Dから上市まで約10年」という経験則が、MPSデータによって統計的に裏付けられた。

株式市場の先見性：投資家は「2年後」に織り込む



Early Warning System: 投資家はMPSを「将来の競争優位の先行指標」として捉え、実際の利益が出る8年前（10年-2年）に株価に反映させている。

知財評価KPIのランドスケープ比較

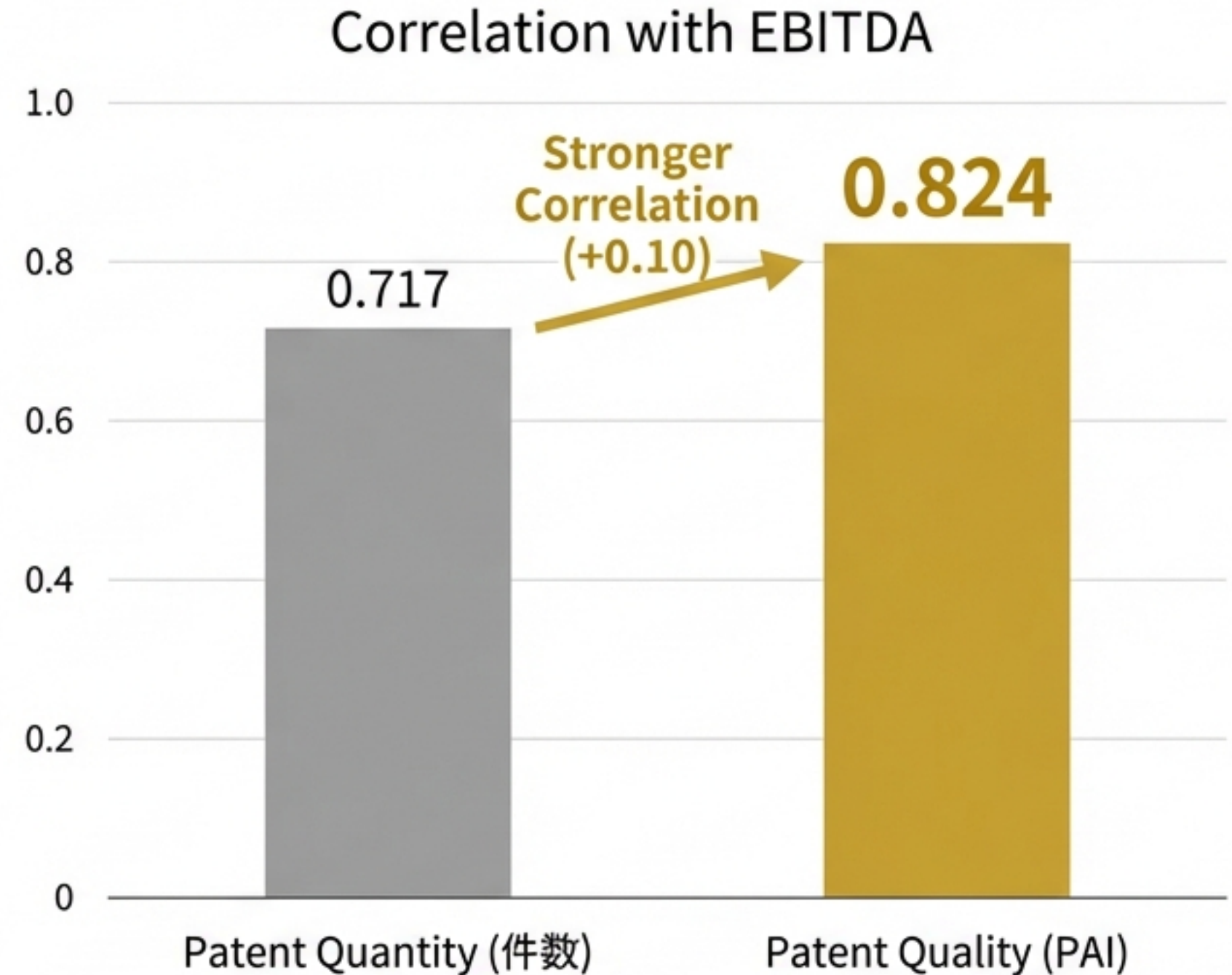
Metric (指標)	Pros (メリット)	Cons (デメリット/課題)
MPS	Transparent, Simple, Removes age bias (透明性・簡便性・年齢補正)	All or nothing (0/1判定), misses hidden gems
Forward Citations (被引用数)	Standard measure of impact	Bias toward older patents (古い特許有利)
Patent Asset Index (PAI)	Combines quality + market size, High correlation	Black box algorithm (複雑・検証困難)
Family Size	Global reach, Investment scale	Cost-based, not necessarily quality
YK Value	Measures defensive strength	Complex calculation

MPSは「取締役会や投資家への説明責任」を果たすための、最も透明性の高い選択肢である。

外部調査による検証と業界のコンセンサス

Source: 日本政策投資銀行 (DBJ)
レポート (2025年5月)

業界のコンセンサスは「量より質」へと確実にシフトしている。中期経営計画に知財戦略を明記している企業ほど、相関が強い。



MPSの研究結果は、既存のイノベーション研究や産業界の実感値と整合しており、統計的な頑健性がある。

MPS活用のための戦略的指針



Strategic Use Cases

Investor Dialogue: 透明性が高いため、IR資料や統合報告書での「技術力の客観的証明」に最適。

Portfolio Health: 自社の特許群における「エリート特許比率」をモニタリングし、質の低下を防ぐ。



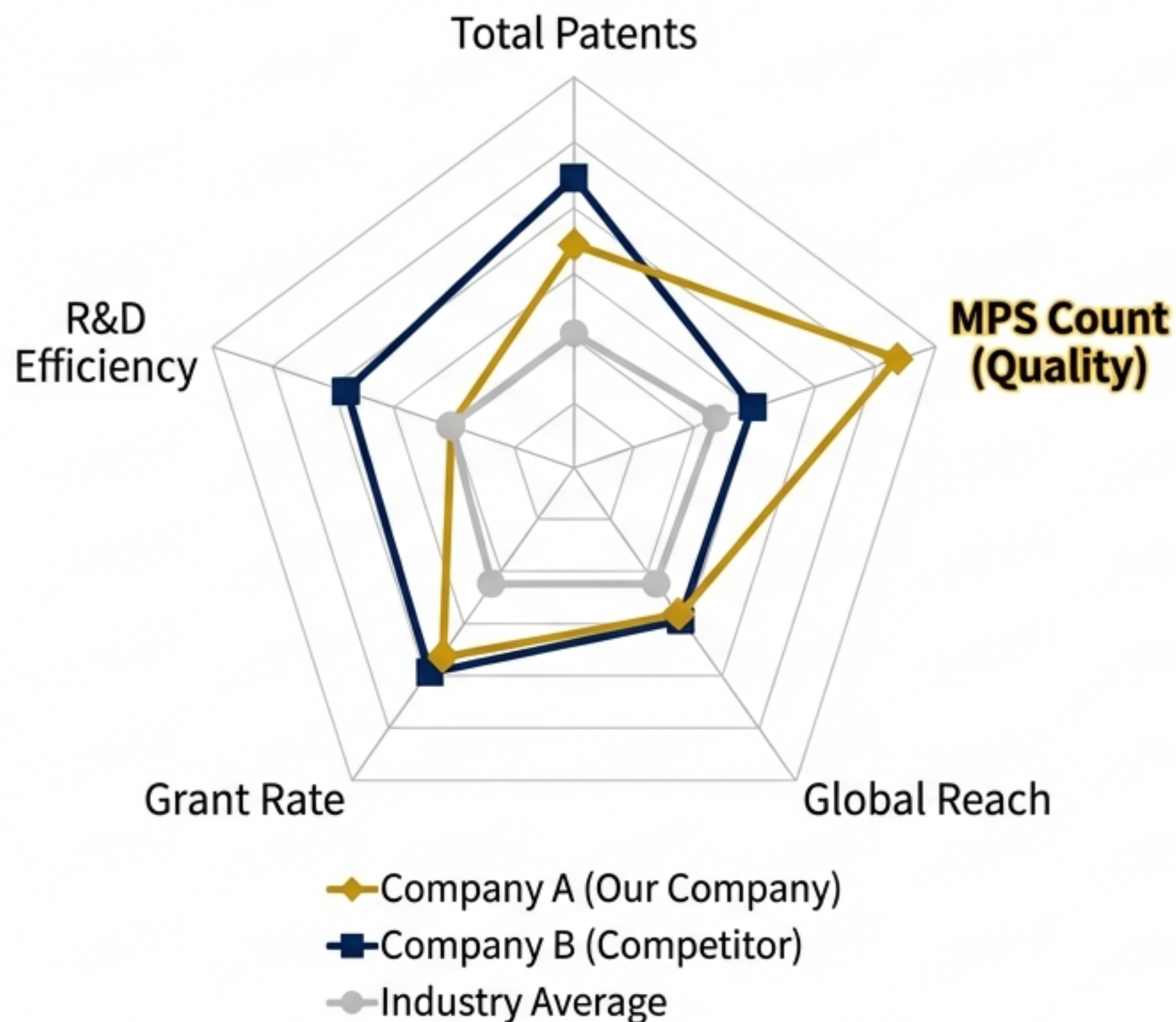
Cautions & Limitations

Citation Bias: 引用されにくい「独占的な基本特許」を見落とす可能性がある。

Sector Dependency: 化学・製薬などR&D集約型では有効だが、小売・サービスなどでは「0件」になるリスクがある。

Recommendation: 単独指標ではなく、定性的なストーリー（事業戦略）と組み合わせて使用すること。

IPランドスケープにおける「競争力の蓄積」の可視化

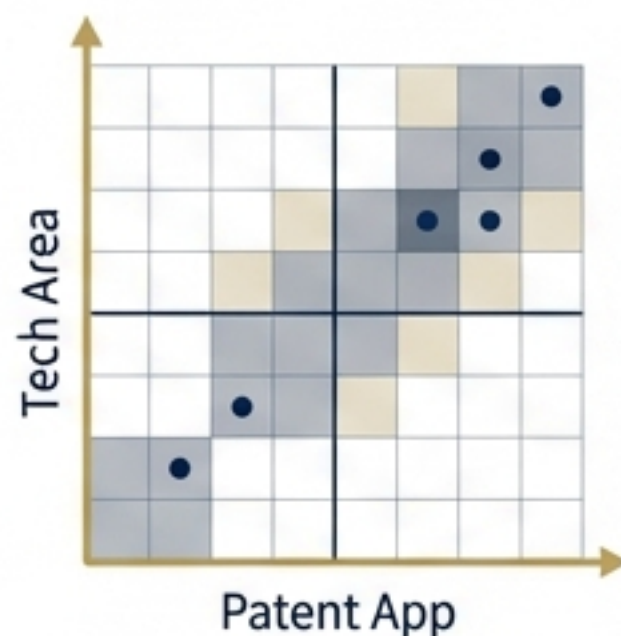


Concept : MPSは個別の特許評価だけでなく、企業全体の「基礎体力」を測る指標になる。

Data Link: 特研究によると、特許競争力の蓄積が大きい企業ほど、長期的には **ROIC（投下資本利益率）** や **営業利益率** が高い傾向にある。

統合報告書における開示戦略とベストプラクティス

Toyota Style



Tech Maps linked
to R&D

Asahi Kasei Style



Portfolio Value
Disclosure

Teijin Style



Strategic Focus
Areas

***Core Advice*:** 単なる数字の羅列ではなく、2年後の市場評価と10年後の利益をつなぐ「将来価値創造ストーリー」として語る。

結論：10年先を見据えた対話のために



1. Patience (時間軸の認識)

知財のリターンは10年スパンで評価する。短期的なPLで判断せず、長期的な視座を持つ。



2. Transparency (透明性の確保)

ブラックボックスな指標を避け、MPSのような客観的・検証可能な指標で信頼を構築する。



3. Storytelling (権利から収益へ)

MPSを「先行指標」として使い、現在の知財蓄積が将来のPBR向上、そして10年後のROIC向上につながるロジックを語る。

参考文献・出典 (References)

****Primary Source*:**

杉光一成, 立本博文, 波多野紅美, 天野達郎 (2023). 「重要特許が企業の財務データに及ぼす影響の一考察」, IPジャーナル第24号.

****Secondary Sources*:**

- 日本政策投資銀行 (DBJ) (2025). 「特許情報を経営の羅針盤に」.
- 内閣府 「知財・無形資産ガバナンスガイドライン Ver 2.0」.
- LexisNexis PatentSight (Patent Asset Index).
- 工藤特許事務所 (YK値).